

有料老人ホームエデンの園
スペシャル ショートショート

寄り添う人たち

作 田丸雅智





田丸雅智氏(ショートショート作家)プロフィール

一九八七年、愛媛県生まれ。東京大学工学部、同大学院工学系研究科卒。二〇二一年、『物語のルミナリエ』に「桜」が掲載され作家デビュー。十二年、樹立社ショートショートコンテストで「海酒」が最優秀賞受賞。「海酒」は、ピース・又吉直樹氏主演により短編映画化され、カンヌ国際映画祭などで上映された。坊っちゃん文学賞などにおいて審査員長を務め、また、全国各地でショートショートの書き方講座を開催するなど、現代ショートショートの旗手として幅広く活動している。書き方講座の内容は、二〇二〇年度から小学四年生の国語教科書(教育出版)に採用。二〇二一年度からは中学一年生の国語教科書(教育出版)に小説作品が掲載。十七年には四〇〇〇字作品の投稿サイト「ショートショートガーデン」を立ち上げ、さらなる普及に努めている。著書に『海色の囁』『おとぎカンパニー』など多数。メディア出演に情熱大陸、SWITCHインタビュー達人達など多数。

田丸雅智 公式サイト : <http://masatomotamaru.com/>

「そういえば、アレ、使ってみた？」

亜希がそう尋ねたのは、職場で美穂子と出くわしたときだった。

「あつ、まだやってない。今日あたり、使ってみようかな」

「私も焚いてみようかな。本当に不思議な力があるのかは怪しいけどね」

二人は笑い合つて、それぞれ仕事に戻っていく。

亜希と美穂子が勤めているのは、診療所も併設された有料老人ホームだ。介護職の亜希と看護師の美穂子は職種は違つていたけれど、ふとしたことから仲良くなつて、今では二人で旅行するほどの仲だった。

そしてつい先日、一緒に行った旅の途中で、二人はお香の専門店に立ち寄つた。そこで作り手の思い出が宿るという「思い出香」なるものの手作り体験を勧められ、二人は半信半疑ながら参加してみることにしたのだった。

その日の夜、亜希は思い出香の小箱を取り出した。中を開けるとコーンの形をしたお香がひとつだけ入つていて、亜希はお皿に置いて火をつけてみた。

煙があがり、爽やかな香りが漂つてくる。

視界が突然ゆらいだのは、その瞬間のことだった。

気がつくと、亜希は自分の部屋ではない場所にいた。

えっ……!?!? どういうこと……!?!?

パニックになりかけた亜希の頭によぎつたのは、旅先でのこんな店主の言葉だった。

—— 思い出香は、焚くとそれに宿つた思い出を追体験できるんですよ。

瞬間的に、亜希は思う。

それじゃあ私、いま自分の思い出を追体験してるってこと!?!? あのお香、本当に不思議な力があつたんだ……!?!?

しかし、最初の驚きが去ると、亜希は大いに違和感を覚えた。

どういうわけか、今いる場所が明らかにうちのホームの診療所の中だったからだ。

ここが私の思い出の場所……!?!?

困惑していると、とつぜん声が聞こえてきた。

「見に行つてくれてありがとね。それで、お部屋の様子、どうだった？」

亜希は声のほうを向く。そこには亜希も見知つた人物が——美穂子の先輩にあたる看護師が立っていた。

そしてなぜだか亜希は、その先輩から聞かれているのは、いま診療所に入院しているあるご入居者のことだと自然と分かる。

亜希の口は勝手に動いて、先輩にこう返事をしていた。

「今のままだと居室での転倒リスクが高いので、もう少し身体機能が回復できるようにケアの質をあげてことを考えたいです」

口からはするする言葉が出てくる。

「逆に、今後は身体に合わせて、お部屋もある程度は改修しないとイケなさそうです。介護のほうには私から共有しておきますね」

それから、とこうつづける。

「ちょっと気づいたこともありまして……」

「どうしたの？」

「お部屋に本がたくさんあったんですけど、すごくきれいに並んでたんです。あの方が看護のことでいつもご希望が細やかなのは、だからだったのかなって。もともと几帳面なところがあたりだからこそ、小さなことを大切になさっているのかもって。今後は、そのあたりも踏まえてケアさせていただくのがよさそうです」

それを聞いて、先輩は「なるほど」とうなずいた。そして、ぜひ反映させていこうという話になって、先輩と別れる――。

そのやり取りや、流れ込んでくる感情の断片から、亜希は状況を理解した。

いま追体験するのは、過去の自分の思い出じゃない……！！

亜希は、前に美穂子とまさにこのご入居者のお部屋について話し合ったことがあるのも思いだし、こう確信する。間違いなく、ここは美穂子の思い出の中だ……！！

どこかで思い出香を取り違えたんだ、と亜希は焦った。

人の思い出をのぞくなんて、すぐやめないと……！！

けれど、亜希の意思に反して、美穂子の思い出はどんどん流れこんできた。

場面は変わり、次にいたのは診療所内の病室だった。

目の前にいる患者さんに、いまや看護師の美穂子となった亜希は尋ねる。

「あつ、そのお菓子、好きなものですよ。どうされたんですか？」

患者さんは教えてくれる。

「さつき見舞いに来たやつが持ってきてな。だが、なんであなたは、わしがこれを好きだと知つとるんだ？」
いぶかしげな患者さんに、笑って言う。

「このあいだお部屋に伺ったときに、教えてくださったじゃないですか。幼馴染の方が、そこのお菓子屋さんで働いてたって」

数日前に、美穂子はそのご入居者に付き添って、お部屋に忘れ物を取りに行った。その方は、普段はあまり自分のことを話すほうではなかったが、そのときはいつになく饒舌になり、お菓子のことも話してくれた。病室だけじゃ分からないこともあるんだなあと、美穂子は思ったものだった。

「そうだったかな。まあ、それはともかく、あんたにもやる」

その方は照れたような表情をしつつ、お菓子をくれた。受け取りながら、思わず笑みがこぼれてしまう――。

場面がどんどん変わる中で、亜希は美穂子がうちのホームに来た経緯にも予期せず触れた。

美穂子は以前に勤めていた病院で、ときどきうちの名前を耳にしていた。ホームから病院にやって来て、また戻っていく患者さんがいたからだ。そして、もともと退院後の患者さんの様子が気になるタイプだった美穂子は、ホームのことがずつと頭に残っていた。

そんな折に、うちの求人広告をたまたま目にして、ここで働いてみたいと直感した。その背景には、ちょうど家庭の事情で病院勤務をつづけていくことに不安を持っていたことも関係していた。が、それ以上に、ここなら患者さんとより深く向き合えそうだと感じたことが大きくて、見学を経て、美穂子はうちに転職してきた。

そんな美穂子も、最初のほうは戸惑う場面が多かった。
疾患だけでなく、人も診る。

それがうちの看護の特徴で、ホームでは医療行為はもちろんのこと、患者さんの人となりをよく知って、その方に応じた個別のケアがいつそう求められたからだ。

しかし、戸惑いはすぐに消えていき、美穂子は大いにやりがいを感じるようになっていく。入院中という「点」ではなく、その方が元気な頃からはじまって、入院中、退院したあと、そして人生をまっとうされるまで「線」でかわりつづけてお手伝いをする。それはまさに自分のやりたかったことで、天職を得たような思いにもなった。

うちのホームでは、看護師以外のスタッフたちと連携できるのも醍醐味だった。

「亜希たちのおかげで、私たち看護師もできることの幅が広がってるんだよ」

いつか美穂子がそう言うてくれているのを思ひだし、亜希は改めてうれしいやら恥ずかしいやら妙な気持ちになる――。

そのとき、また視界が揺らいで場面が変わった。

瞬間、亜希は「あれ？」と不思議に思った。

自分はいま美穂子の思い出の中にいるはずなのに、現れた光景にハッキリと見覚えがあったからだ。どういふことだと思ったのも束の間、亜希はすぐにその理由に思い当たる。

なるほど、それで見覚えが――。

同じ頃、美穂子も思い出香がもたらす亜希の思い出の世界に浸っていた。盗み見るようで悪いという気持ちも抱えつつ、次々と流れこんでくる亜希の思い出を追体験しつづけていた。

美穂子も亜希と同様に、これまで知らなかった亜希にまつわることをたくさん知った。

亜希は新卒でうちのホームに入る前、介護職の仕事に対してこんなイメージを持っていた。

介護職は、肉体を酷使する体力勝負の仕事だ、と。

しかし、実際に働きはじめてイメージは大きく変わった。たしかに体力勝負の面もあったけれど、それよりもキモになるのは「いかに感じ、いかに考えられるか」だと亜希は痛感したからだ。

特にうちのホームでは、ご入居者おひとりに対する介護スタッフの配置が厚いため、それぞれの方に費やせる時間もおのずと増えて、工夫できる余地が生まれる。逆に言えば、決まったことをただこなすだけではまったくダメで、おひとりおひとりに合ったケアについて日頃から徹底的に考えて、実行していく必要があるということだ。

「介護は『想像と創造』だよ」

亜希が先輩からもらったそんな言葉を、美穂子も知る。

そもそも、うちのホームには介護が必要になる前の方しか入居できないという決まりがある。だから、亜希たち介護スタッフは新たに入居されてきた方との接点がほとんどない。が、そんな中でも健康相談の時間やほかのスタッフからの話を通して、できるだけみなさんの趣味や嗜好、大切にしていることなどを知る努力をしなければならぬ。それらは、やがて介護が必要になったときに重要になってくるからだ。

美穂子は思い出香の力によって、前に亜希が担当していたあるご入居者との場面を追体験した。その方はもともお風呂が大好きで、それを知っていた亜希は同僚にこんな相談を持ち掛けた。

「どうしても、お風呂に入れてあげたいんです」

事情を話すと、同僚は賛成してくれた。

「それは何とか実現させたいね。でも、今の健康状態でお風呂に入っても大丈夫かな……」

「看護と相談してみながら、どうすればできるか探ってみます」

そのとき、美穂子は思いだす。前に亜希から、この方の入浴のことで相談を受けたことがあったな、と。そして、それが実現できたとき、亜希はご家族から感謝の言葉をいただいたのだと話していた。

美穂子はまさに、思い出香の思い出の中でその場面にも出くわした。

「こんな状態でも母をお風呂に入れてもらえるだなんて……本当にありがたいです」

ご家族からのお言葉に、亜希の心にぽつと温かいものがあったことを美穂子は感じる。それは感謝されたことに対してというよりは、ご入居者の生き方にささやかながらも寄り添えたことに対する感情だった。

場面は変わり、美穂子は亜希が、自分たち看護師だけではなくスタッフみんなと連携していることも改めて知る。

あるときは、最期が迫り、なかなか食事がとれなくなったご入居者に何かできないかと考えて、スタッフに外のお店からお惣菜を買ってきてもらった。そのお惣菜はその方が好きだったもので、ほんの少しだけだったけれどおいしそうに召し上がってくださった。

またあるときは、自分では動けなくなったご入居者の代わりに、スタッフたちがケアの際に毎朝その方のお部屋でお仏壇に手を合わせた。その方が元気だった頃に大切にされていた習慣だったからだ。

それらは、亜希たちスタッフの自己満足では決していない。

身体的なお世話はもとより、その方の人生にしっかりとかわり、人生をまつとうするお手伝いをさせていた

だ。亜希のそんな強い思いが美穂子にも伝わってきて、自分と同じ気持ちであることがうれしくなる。

そのとき、場面が変わって別の光景が現れた。

それを目にして、美穂子は亜希の思い出の中にいるのに既視感があるなと首をかしげる。

が、すぐに悟る。

そういうことが――。

亜希と美穂子が連絡を取って落ち合ったのは、その翌日のことだった。二人はお互いにそれぞれの思い出をのぞいたことを謝りつつも、こう言った。

「亜希の仕事、知らないことばかりだった……」

「美穂子の仕事も……でも、うちのホームって、やっぱり好きだなって思ったなあ」

「だね。それに、ご入居者も私たちも、みんなでひとつのコミュニティなんだなって改めて感じた」

話の中で、二人は最後に共通の光景を見ていたことも判明した。

「やっぱり、あの場面はお互いに心に残ってるんだね……」

亜希の言葉に、美穂子も神秘的な面持ちになる。

最後に二人が見たのは、ホームの玄関前にご入居者の方々やスタッフたちが整列しているところだった。

厳かな雰囲気の中、やがて棺が運ばれてくる。

ご家族の方が挨拶をして、棺は車に収められる。全員が一礼をして見守る中で、故人はホームの正面から堂々と旅立っていく……。

改めてその光景を思い出しつつ、亜希がつぶやく。

「あの方、外の病院に入院されたとき、ずっとここに帰りたいって言うてくださってたよね」

「私たち、家族の代わりになんてなれないけど……あの方の人生に何とか寄り添えてたらいいなあ……」

少しの沈黙が流れたあとで、やがて亜希が口を開いた。

「じゃあ、そろそろ仕事に戻ろっか」

「そうだね」

美穂子はうなづく。

そして、微笑みながらも力強い口調でつぶやいた。

「またすっかり、がんばっていかないとね。ご入居者のみなさんの思い出の中に、私たちも少しだけでも登場させてもらえるように」